



日本宣教ニュース

NO. 14 2019年1月

東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」（コロサイ1：6）

【巻頭言】

「日本宣教のこれから」

塩釜聖書バプテスト教会牧師
保守バプテスト同盟議長

大友 幸証

宣教の主体者は、キリストの体なる教会である。そして宣教とは、主イエスが「あなたがたに命じておいた、すべてのこと」（マタイ28:20）を宣べ伝えることである。キリストの教えは、私たちが伝道で強調する「神・罪・救い」以外に、隣人愛の実践など実に多岐に渡っている。このような多岐に渡る教えを包括的に宣べ伝え、体現していくことが、各地に建てられている教会の宣教の使命である。しかし、その宣教の主体者なる教会が今日、日本の中で弱まっている。教会の高齢化に加え、教会の統廃合が進んでいる。教会の衰退は宣教の衰退であるから、教会をどのようにして再活性化していくのかが、これからの日本宣教を考える上で第一に取り組まなければならないことである。

ビジネスの世界では、常にイノベーションが必要だという認識がある。それは、現在の事業がいくら順調であっても、いつかは必ず衰退期を迎えるということを多くの会社が学んできたからである。衰退期に入ると新規事業が体力的に厳しくなる、もしくは不可能になるので、多くの会社が事業で成功している間に新規事業、つまりイノベーションを行わなくてはならないという危機感を持っている。

教会に常に必要なイノベーションは、子ども達への宣教のあり方であると私は考えている。教会は、何度も「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。」（ルカ18:16）という命令を、主イエスから受けてきたにも関わらず、大人にとって心地の良い教会形成がなされてきた。多くの教会の開拓当初には、子ども達があふれていた。福音に最も心を開いているのが彼らだったからである。しかし、教会が成長するに従い、教会は制度化していき、子ども達にとって非常に居心地の悪い場所となってしまった。そして多くの教会は、その結実として高齢化と衰退期を迎えている。

子ども達を取り巻く環境は、ものすごい勢いで変化している。その変化に教会が対応して行くことが、教会が求めるべきイノベーションである。子ども達の目線に立ちながら、子ども達に聞きながら、教会を形成して行くなれば必然的に次世代が生まれてくる。常に変化が求められるため、大人にとって非常に居心地の悪い教会になるかもしれない。しかし、その居心地の悪さを受け入れて、子ども達と一緒にいることが「楽しい」と思える体質にまで達することができるならば、その教会は、成長する教会、宣教する教会となると信じている。

【JMRレポート】

今回の JMR レポートは、6 月 30 日に関西学院大学・西宮上ヶ原キャンパスにて開催された「第 13 回日本宣教会」における基調講演（但し、発表内容の概要。論考の全文は、『宣教学ジャーナル』第 13 号に掲載される予定です。）を、カトリック名古屋教区 松浦悟郎司教のご了解をいただいで、「日本宣教会ニュースレター」（第 15 号 2018 年 11 月発行）から転載させていただきました。また、『中外日報』のオンライン情報からも、記事を転載させていただきます。

【基調講演】

「難民・移住者の問題を今日の宣教の課題として共に考える」

松浦悟郎 カトリック名古屋教区・日本カトリック難民移住移動者委員会

私たちの第一の宣教の課題は、社会の非福音的な価値観を福音的な価値観に変えていくことにあるのではないだろうか。今日は、難民・移住者の現状を見つめることから、何をどうしたらよいかということと共に探してみたい。

世界の移民は約 2 億 4400 万人、難民・避難民は約 6,850 万人、難民の 53%が子どもだという。不安定で大変な状況に置かれている難民への対応が世界で大きな問題となっている。2017 年度、日本には 195 カ国出身の 256 万人の外国人が滞在し、難民申請者は 19,628 人に膨れ上がった。しかし日本政府による難民認定者は年間 10 数名と変わっていない。日本政府は、海外から単純労働者を受入れる「骨太の方針 2018」を発表したが、必要な労働力を一時的に確保するためだけの策であることが強調されている。安倍首相による「決して移民政策ではない」という発言は、外国人労働者の人権や家族に配慮しようとするのではなく、企業への配慮を優先するという方針を示しているのだろう。

日本のカトリック難民移住移動者委員会が取り組んでいる課題の一つは、「技能実習生」や「研修生」という名目での人身取引である。日本に来る技能実習生は、中国人からベトナム人にシフトしてきた。日本のカトリック教会で働いている約 30 名のベトナム人司祭と約 200 名のベトナム人シスターの力を結集して、日本各地で劣悪な環境で働かされているベトナム人技能実習生たちと関わり、彼らが抱えている諸問題に寄り添い、解決の糸口を探そうとしている。しかし技能実習生の人権を守ろうとする動きは、送り出し機関からの収入を当てにするベトナム政府にとっては好ましくなく、ベトナムの教会としても政府に睨まれることはできないようで、障壁は高い。

もう一つの課題は、ジャパニーズ・フィリピン・チルドレン (JFC) への対応である。日本人とフィリピン人の間に生まれた JFC は、両国に約 20 万人いると推定されている。日本人の父親が子どもを認知すれば、両親が結婚していなくても子どもは日本国籍が取得でき、その子どもの国籍取得手続きをするためなら母親も養育者として来日し就労できるという制度を悪用するブローカーたちの活動が活発化している。様々な NGO や弁護士の方々のネットワークに支えられて、助けを求めて教会にやって来る彼らに何とか寄り添おうと努力している。こうした問題を生む土壌として、日本が自らの過去に目を向けようとしてこなかったことがある。一つは、山崎朋子の『サンダカン八番娼館』（文春文庫）や大場昇の『からゆきさんおキクの生涯』（明石書店）で描かれているような、貧しさ故に人身売買され、祖国を離れざるを得なかった日本人女性たちのこと、もう一つは、かつての戦争での従軍慰安や多くの人々を強制連行した過去だ。ちょうどイスラエルの民が、自分たち自身が寄留の民であったことを再確認することで、寄留の人々に対する関わりを見つめ直し隣人愛を大切にするようになったのと同じように、日本もこうした過去に向きあう必要がある。

森岡正博は『無痛文明論』（トランスビュー）において、先進国の人間が苦しみとか煩わしさを避けるために取っている方法の一つが自らに「目隠し」をすることだと指摘している。

たとえば、苦しんでいる人を見るのがつらいと、本能的に出会わないようにすることで自分に目隠しをしているというのだ。心が痛むから見ないようにし、その人が存在していないかのように行動する。その人がいることを頭の片隅では分かってはいるけれど、自らに目隠しをすることで煩わしさから解放されるすべを現代人は身に付けているというのだ。地縁や血縁に結ばれた共同体の中にいると、私たちは安心していられる。それは自分でコントロールでき、いろいろなことが予想できるからだ。しかし地縁や血縁による共同体から離れたり、それらの共同体以外の人と出会ったりすると、予想ができなくなり、不安になる。どうにもならない現実にもぶち当たってしまうものだ。だからこそ神はアブラハムに「生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地にいきなさい」と命じられたのではないだろうか。神はイスラエルの民を地縁や血縁による共同体から離れさせ、「『神が示す地』に向かう共同体、つまり神を結び目とする共同体を作り出すことによって、祝福への道を全人類に示そうとした」（雨宮慧『旧約聖書を語る上』NHK 出版）。いつの間にか排除している他人、見ないようにしている外国人や難民と出会う新しい体験をするならば、私たちも神の国に向かう歩みを進めることができるはずだ。

中川明は『妖怪の棲む教会』（夢窓庵）において、「わたしたちの『頑固な現実』、すなわち、『他人』などの『他』と、正直に、真正面から向き合うさまざまなチャンスをつくり出すことで私たちは神と出会います」と語る。自分たちを脅かすのではないかと思ひ込み、見ないようにしている難民、移住者、見知らぬ人と向き合っこそ神との出会いがある。神の導きに信頼して、さまざまな境界を打ち破って約束の地に向かって歩みを進めることこそが教会の使命だろう。

中外日報の新聞記事から【2018年9月～2018年12月】

宗教の自己改革 純粋な宗教性の追求

2018年10月24日付 中外日報（社説）

現代の社会で宗教への関心が薄れていくのは、世俗化した社会にも問題があるが、伝統からの脱却を果たせないでいる宗教の側にも問題があろう。宗教の自己改革が求められているといえようが、改革といっても宗教を単に現代人の「需要」に合うように変えればいい、ということではあるまい。

宗教改革といえば、16世紀の西欧で起こった、カトリック教会からのプロテスタント教会の独立が代表的である。カトリック教会の免罪符発売に対するマルチン・ルターの批判が世界史的な事件へと発展したのは、その神学的批判が、中・北欧のバチカンからの独立運動、民族主義の抬頭と結び付いたからである。宗教改革が政治運動と結合したわけだ。

とはいえ、ルターの真意が宗教の純粋性回復にあったことは否めない。当時のカトリック教会は、サン・ピエトロ寺院という巨大な聖堂の建設などもあって財政的に逼迫していたので、信徒の天国入りの鍵を持つとされた教皇が免罪符を発売したのである。それを批判したルターらの改革者はバチカンの関与を排して信徒と神との直接の関係を重視したのであった。信仰の純化を目指したといえる。

他方、我が国の鎌倉仏教の成立についても同様の指向が見られよう。南都北嶺には鎮護国家の思想に基づき、加持祈祷が重んじられた。それに対して、浄土教と禅宗は信心と覚の純粋性を求めた、という見方がなされる。

日本人は正月には神道信者、葬式は仏教者、結婚式はキリスト教徒で、宗教的節操がない、とはよく聞く揶揄だ。それに対し、宗教間対話が進んだ最近では、日本人は宗教間の争いをなくして上手に宗教のすみ分けを果たしているという「賛辞」もある。

これらの儀礼は、人が新しい領域に入るについて祝福を与える、いわゆる通過儀礼だが、日本では通過儀礼には宗教性が残っているわけだ。しかし最近では無宗教の結婚式、葬式も多くなった。いずれにせよ、ここには純粋な宗教性はない。

また、高度成長期の会社では禅者の指導のもとに坐禅会が開かれ、いまは、いわゆるマインドフルネスの瞑想が注目されている。だが、これも宗教心の純粋性を求めるものとは考え難い。

現代において宗教の自己改革が求められているとすれば、宗教に対する社会の「需要」に応じる方向ではなく、むしろそれを排して、政治と経済中心の現代において、純粋な宗教性がいかなるものかを明らかにすることではないだろうか。

教団・教派、宣教団体の機関紙・ニュースから

カトリック中央協議会 日本司教団関連文書

2018年「世界宣教の日」教皇メッセージ

「若者とともに、すべての人に福音を届けましょう」

親愛なる若者の皆さん

わたしは、イエスからわたしたちに託された宣教について、皆さんと一緒に考えたいと思います。そして、皆さんに語りかけると同時に、神の子としての冒険を教会の中で生き抜いているすべてのキリスト者にも呼びかけます。わたしは、キリストから託された宣教に向けてキリスト者の信仰が開かれたとき、その信仰はいつまでも若々しくあり続けると確信しています。だからこそ、皆さんとの対話を通してすべての人に語りかけているのです。若者を深く愛し、若者のために力を尽くした聖ヨハネ・パウロ二世教皇は、「宣教活動は信仰を活性化する」（回勅『救い主の使命』2参照）と記しました。

宣教の月であるこの10月にローマで開催される世界代表司教会議（シノドス）は、主イエスが若者の皆さんに、さらには皆さんを通してキリスト教共同体に伝えようとしていることに対する理解を、信仰の光のもとに深める機会となるでしょう。

生きることは遣わされること

人は皆、遣わされており、そのために地上に生きています。「引き寄せられ」、「遣わされる」という二つの動きは、わたしたちがとくに若いころ、愛の内的な力として心に感じるものです。この力は未来を約束し、わたしたち自身を前へとつき動かします。いのちがいかに驚きをもたらし、人を引き寄せるかを、若者の皆さんはだれよりも切実に感じています。喜びをもって世界に対するそれぞれの責任を果たすことは大きな挑戦です。わたしは若さには光と影が伴うことを十分承知しています。そして、わたし自身の青年期と家族のことを振り返り、よりよい未来をいかに強く望んでいたかを思い起こします。わたしたちが自ら選んでこの世に生きているのではないという事実は、わたしたちに先立ってわたしたちを存在させる働きかけがあることを直感させます。「わたしはこの地上に派遣されているのです。そのために、わたしは

この世にあるのです」(教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』273)。わたしたちは皆、このことについて考えるよう招かれています。

わたしたちは皆さんにイエス・キリストを告げ知らせる

無償で受けたもの(マタイ10・8、使徒言行3・6参照)を告げ知らせる教会は、この地上で生きることの意味へと通じる道と真理を、若者の皆さんに伝えることができます。わたしたちのために死んで復活したイエス・キリストは、わたしたちを解放するためにご自身をささげ、そのことの真正で完全な意味を追求し、見だし、伝えるよう教会を駆り立てています。若者の皆さん、キリストとキリストの教会を恐れてはなりません。そこには、人生を喜びで満たす宝があります。わたし自身の体験から申し上げますが、わたしは信仰のおかげで自分の夢の基盤と、その夢をかなえる力を得ました。わたしは、ひどい苦しみや貧しさのために顔をゆがめている多くの兄弟姉妹を見てきました。しかし、イエスとともにある人々にとって、不幸はどんなときにもより深く愛するよう促す機会となります。多くの人々、多くの若者が、ときに殉教に至るほどに、福音への愛のために惜しみなく自分自身をささげ、兄弟姉妹に奉仕してきました。自らをささげ(一コリント1・17-25参照)、この世のいのちのために福音を告げ知らせる(ヨハネ3・16参照)という神の論理を、わたしたちはイエスの十字架から学びます。キリストの愛の炎によって焼かれることにより、人は心を燃え立たせ、成長し、愛する人を照らし、温めます(二コリント5・14参照)。神の広大な地平へとわたしたちを開け放つ諸聖人の教えに従い、どんな状況に置かれても「キリストがわたしの立場だったら、どうされるだろう」と自らに問いかけてください。

地の果てまで信仰を伝える

若者の皆さんも、洗礼を受けることにより教会の生きた一員となり、福音をすべての人に伝えるという使命とともに担っています。皆さんの人生はこれから開花します。わたしたちは教会の秘跡を通して与えられる信仰の恵みのうちにはぐくまれ、幾世代にもわたるあかし人の流れに加わります。そこでは、経験を重ねてきた人々の知恵が、未来を切り開く人々のためのあかしや励ましとなります。一方、若者の新鮮さは、人生の旅の終着点に近づいている人々の支えや希望となります。このように異なる世代の人々が共存する中で、教会の宣教は各世代をつなぐ橋となります。そして神への信仰と隣人愛により、深い一致がもたらされます。

教会の宣教の核心である信仰の伝達は、愛を「感染させる」ことを通して行われます。物事の意味が新たに見いだされ、人生が満たされたことを、喜びと情熱をもって示すのです。人々の心を引きつけながら信仰を伝えるためには、心が愛により開かれ、広げられなければなりません。愛に限界を設けることはできません。愛は死のように強いからです(雅歌8・6参照)。愛が広がることにより、人々は出会い、あかしし、伝え合います。そしてすべての人と愛のうちに分かち合うようになります。その中には信仰から遠ざかっている人、信仰に無関心な人、そしてときには信仰に敵意や反感を抱いている人も含まれます。まだイエスの福音にも、秘跡としての教会にも接していない人々や文化圏、宗教は、遠く離れたところにある「地の果て」です。イエスの復活以来、弟子たちは、主が絶えずともにおられる(マタイ28・20、使徒言行1・8参照)という確信をもって、宣教者として遣わされてきました。これこそが「諸国民への宣教(missio ad gentes)」と呼ばれるものです。人間の中にある、キリストを必要としているもっとも荒廃した周縁の地とは、信仰に対して無関心で、神によるいのちの充満に嫌悪感すら抱くことです。すべての実質的、霊的な貧しさ、兄弟姉妹に対するあらゆるかたちの差別は、神とその愛を拒んだ結果としてつねに生じています。

若者の皆さん、今日、この地の果ては非常に身近で、いつでも簡単に「行き来できます」。デジタル世界ではソーシャル・ネットワークが隅々にまで浸透し、国境の存在が薄れ、境目が隔たりが無くなり、相違が縮小しています。なんにでも手が届き、あらゆるものがすぐそばにあるかのようです。しかし、人生に深く結びつくたまものがなければ、どんなに多くの触れ合

いを体験しても、いのちの真の交わりに加わることはできません。地の果てまで宣教するためには、この地上にわたしたちを置いてくださったかたから与えられた召命のために、自らをささげなければなりません（ルカ9・23-25参照）。キリストに従いたいと願う若者にとってもっとも大切なことは、自分自身の召命を探し求め、その召命に忠実に従うことであると、わたしはあえて言いたいと思います。

愛をあかしする

教会の中に生きておられるキリストと皆さんが個人的に出会えるよう尽くしているすべての教会共同体に、わたしは感謝の意を表します。その中には小教区、教会の諸団体や運動、修道会、さまざまなかたちで行われる宣教活動が含まれます。人間の尊厳を尊重し、愛する喜びとキリスト者であることの喜びをあかししながら、「もっとも小さくされた人々」（マタイ25・40参照）に仕えることを、多くの若者が自発的に宣教する中で感じ取っています。教会におけるこのような体験が物語っているように、一人ひとりの養成は単に職業的な成功に備えるためのものではなく、神から与えられたたまものをはぐくみ、大切にすることにより、他者にさらに奉仕できるようにするものです。たとえ一時的であっても称賛に値するこうした宣教活動は、豊かな実りを生み出す出発点であり、召命の識別を通して、宣教者として自分自身をすべてささげることを決断するための助けとなります。

教皇庁宣教授助事業は、福音をすべての国の人々に告げ知らせよう促し、真理を求める大勢の人々の人間的、文化的な成長を支えるために、若々しい心から誕生しました。教皇庁宣教授助事業を通して惜しみなくささげられ、届けられる祈りと物的支援は、聖座の取り組み、すなわち自分の必要としているものを受け取った人々が、今度はそれぞれの場であかしできるようにする活動のために役立っています。自分が持っているもの、そして何よりも自分のありのままの姿を差し出せないほど貧しい人などいません。わたしは、チリの若者への呼びかけをここで繰り返したいと思います。「自分には差し出すものがないとか、自分はだれも必要としないとか、考えないでください。大勢の人があなたを必要としています。このことについて考えてください。多くの人が自分を必要としていると、それぞれが心から考えてください」（「若者へのあいさつ」マイブ巡礼聖堂、2018年1月17日）。

親愛なる若者の皆さん、若者のためのシノドスが行われるこの10月、宣教の月は、わたしたちがさらなる情熱をもってイエスのために、そしてイエスの使命のために地の果てまで出かけ、宣教する弟子となるための新たな機会となるでしょう。わたしは使徒の元后聖マリアと聖フランシスコ・ザビエル、幼きイエスの聖テレジア、福者パオロ・マンナに、わたしたちすべてのためにとりなし、つねに寄り添ってくださるようお願い求めます。

バチカンより
2018年5月20日
聖霊降臨の主日
フランシスコ

（カトリック中央協議会事務局訳）



石橋議長、久世副議長、雲然書記、秋山総幹事

教団総会を終えて41総会期がはじまった。石橋秀雄議長、雲然俊美書記が5期目を担い、新しく久世そらち副議長が加わっての初三役となった。18年4月より着任した秋山徹総幹事と共に新しい四役で教団の舵取りを担うことになる。「伝道する教団の建設」を掲げて機構改定に実質的に着手する総会期となる。全教団的に取り組むことが求められている。

「伝道する教団の建設-伝道の命と力の回復」を主題に掲げた、第41回日本基督教団総会は、10月23日から三日間、東京・池袋のホテルで開催され、総会議員400名中、開会時376名が出席した。沖縄教区は、34回総会以来、8回連続して議員を選出しなかった。

石橋秀雄議長は、議長報告に先立ち、17カ月間、総幹事不在だったことを詫び、秋山徹総幹事選任の経過を報告した。

議長報告で、石橋議長は、「2016年度の受洗者は、939名で、教団創設以来最少の受洗者だった。教会にしか与えられていない『伝道の命と力の回復』が求められている」とし、「主の伝道命令に忠実に従い、『伝道する教団の建設』を進めるため、三役・教区議長8名・常議員8名で構成する教団伝道対策検討委員会を設置し、議論を深めて、第42回教団総会に『教団機構改定議案』を提案する」と明らかにした。

【4892号】第41回教団総会 報告会 協議会 教団の諸課題について報告、協議

《報告会》

「WCC世界宣教伝道会議」については、三浦洋人氏（仙台北教会）、野川祈氏（国立教会）、廣中佳実氏（教団職員）が、「会議の目的として、欧米中心の伝道ではなく、第三世界の課題に向き合うための会議であること。主の弟子であること、宣教すること、エキュメニカルであることという三本柱を中心に活動を行っていること。違いを乗り越えること、少数意見に耳を傾けることを学び、また、女性の権利を守る等、マイノリティ問題への意識を高めることが出来た」と報告した。

「リフォユース500」については、増田将平実行委員長が「中高生大会について、最終的に中高生自身で礼拝を形作ることを目標にプログラムが展開された。出身神学校や教派的背景の違う比較的若い約70名の教職がスタッフとして奉仕したことは画期的なことだった。青年大会は超教派の大会としたが、準備の中で、他教派からの教団への期待を強く感じた」と報告した。

（小林信人報）

《協議会》

総会二日目午後、議事の終わりに約1時間の協議会が持たれた。18年各教区総会において「教団機構改定骨子案」が示されたことを受けて教団全体の意見を聴くはじめての協議の場となった。

質疑応答ではなく、議場に立てられた4本のマイクに発言者が並び次々に発言した。17名の発言者が概ねまとめると次のような意見を述べた。財政の逼迫に機構改定は必須である。教団総会規模、教団三局体制、50年にわたって機構の見直しを行っていないことなどの指摘。その一方で、財政問題からのみの機構改定が先行することで、そもそもの伝道論や宣教論が希薄になることへの危惧。教団紛争において顕著となった、いわゆる教会派、社会派と言われる教会群を越えての改革の必要。他教派の改革の実情調査、青年伝道、離島・過疎地の伝道、信徒育成、献金運動など、発言は多岐に渡った。

一つの結論や協議会としての着地点があったわけではなく、それぞれの発言を踏まえて骨子案への具体的な肉付け、展開、提案が今後必要で、41総会期の最も重要な案件となる。

(新報編集部報)

【4889号】▼教区青年担当者会・教育委員会▲若い世代が教会を居場所とするために

(2018年10月6日)

《教区青年担当者会》

第8回教区青年担当者会が、9月3日から4日にかけて教団会議室で開催された。

今年度は講師に岡村直樹氏（東京基督教大学大学院教授）を迎え、一日目に「ユースミニストリーの実践とリーダー養成」と題した講演をしてもらった。いかに若い世代が教会を居場所とできるかに主眼が置かれた講演であった。教会や地区などの組織において、ユース（若者）と共にいるリーダーたちは、しばしば若者と上の世代との「中間管理職」のような存在となる。ユースリーダーたちに前からある型を押し付けるのではなく主体性を尊重し、また時代を見据えた柔軟さをもって接していくという、教会のあり方も教示された。一日目は講演のあと、ユース向けに開催された「リフォユース500」「台湾ユースミッション」「えきゅぷろ！」の報告がなされた。

二日目は分団のあとにまとめの時間をもった。このまとめの時は、参加者からの多くの本音がぶつけられたひとときであった。たとえば一日目に報告されたユース向けの諸集會も、教団新報や他の媒体で情報が発信されているが、その活発さを共有できているのはごく一部であることも指摘された。教団内の諸教会が、どうしたらひとつとなって青年育成に取り組めるか、そのことについてはもっと検討していかなければならない。また、「地方」の教会の青年をよりよく「都市」の教会に送り出したいという意見も多く出された。青年世代の特徴として、ある程度の年齢になったら東京などの大都会に出て行く人が多い。それは教会でも同じである。せっかく教会あるいは地区で大切に育てた青年も都会へ送り出さざるを得ない。都会にある教会には、そうした青年を受け入れてほしいが、しかしそれが十分に機能していないのが現状である。

この青年担当者会は「無事に終わらせる」ための会ではなく、こうした率直な意見をぶつけてもらい、課題を見つけてより良い青年育成につなげる場であることを委員として実感した次第である。

(望月 麻生報)



「教会も社会の一部では？」

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩 新一

「教会の中で政治的な話はちょっと…」、今も昔もよく聞く言葉です。政教分離の原則があるのだから、様々な考えを持つ人の集まりだから相応しくないという思いがあるのかも知れません。私たちの価値観は、その人の経験によって作られ、その人の生き様を映し出す鏡だと言われます。その価値観をイエスさまの教えに従わそう、神さまと人々を愛する道を選びとっていこうとするのがキリスト者であるとするならば、私たちの生きている現実社会との関りを抜きに、信仰生活は送れないと思うのです。

政教分離原則という言葉は、国家と教会の分離の原則。「政」とは、狭義には統治権の主体である「政府」、広義には「君主」や「国家」を指す。「国家の非宗教性、宗教的中立性の要請、その制度的現実化」。信教の自由の制度的保障、政教分離と信教の自由は不可分、とウィキペディアなどでは説明されています。

天皇の代替わりを来年5月に控え、各教派から要望書が出されています。政教分離の原則や信教の自由の観点から、国家の行事として大嘗祭などが行なわれることへの懸念です。これは、かつて日本が天皇を国家元首として行なった戦争の反省に基づくものです。今の時代にそんなことはあり得ないし、心配しすぎだと思われるかもしれません。しかし、現政府は憲法に自衛軍を明記して、武器を持って戦うことを可能にする内容に変えようとしていますし、強い日本を取り戻す、愛国心を育てなければと宣伝をしています。これだけグローバル化した世界の中で、自国ファーストな考えが果たして通用するのでしょうか。

私たちは世界に広がるアングリカン・コミュニオンの一員として、今の日本や世界の流れの中で、すべての「いのち」を大切に作るキリスト者として、正義と平和の課題について声を発する責任があると思っています。様々な宗教や教派からも、それぞれの信仰的な良心に基づいて、政治や国の行政に携わる人々へ声が発せられています。それは、大切な人の命が失われないために、傷つき後悔することのないように、弱い立場に置かれた人々に寄り添うためではないでしょうか。

「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」（マルコ10：45）

「今は昔？」

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩 新一

「ほめたたえよ、主イスラエルの神を／神はその民を訪れてこれを解放し、わたしたちのために力強い救いを／僕ダビデの家に建てられた」（祈祷書「ザカリアの賛歌」より、ルカ1：68-69）

教区会を終えて降臨節を迎え、一足先に新しい一年を歩み始め、私たちの意識を常に新しくしてくださるイエスさまの誕生を祝う準備の時期を過ごすにあたって、先達の言葉をご紹介します。1983年の第38総会で、日本聖公会祈祷書（1959年版）から「天皇」の字句と「天皇のための祈り」「皇室のための祈り」を削除する議案が、部落差別問題委員会から提出されたことがありました。その議論の中で、ある総会代議員が「娘を部落の人のところへ嫁にやることになれば躊躇する。」という内容の部落差別発言をしました。他の議員から指摘を受けて、議事録から自分の発言の削除を願い、議場もそれを承認してしまいました。この議案はその総会では否決されますが、3年後の第39総会に再提出され、可決されています。

また、先の議論の中で、別の代議員が、「天皇陛下に対する祈りを削除しても、部落民の痛みには役立たないだろう。自分たちには日本に福音を伝えるという大きな使命が与えられている。天皇陛下の祈りを削除するなら異教キリスト教を知らない日本人に多くのつまずきを与え、福音宣教の妨げになることを心配する」という内容の発言もありました。そして今度は、「天皇の問題とか部落民の問題に無関心だったが、差別された100万同朋、沖縄県民の一人として発言せざるをえない。虐げられた者は耐えることによって強くなるが、この総会の議論を聞いて、今なぜ日本聖公会の教勢が伸びないのか良く分かった。弱き者の心を知らない、声なき者の声を聞く耳を持たない人があまりにも多い。権威のために祈るが、弱い者のために祈ることを知らぬ聖公会はこれからも伸びません。天皇のために祈ることが、ある人々にとって、もっと惨めな痛い思いとなるなら、この際私たちは、その一匹の弱い羊のために、その弱い者の立場に立って考えましょう。そういう人の立場に、もっと自らが入っていくような、そういう信仰者になりたいと思う。率直な気持ちから、天皇のために祈らなくていいと思う。「天皇のための祈り」を削除しても痛くも痒くもない。しかし、それで聖公会が変わる。どう変わるか、聖公会はエリート集団じゃない。庶民のための信仰の組織で、そういう教えをもっと底辺の人々に広めてゆく力がある。そういう働きをするという認識を持った方がよいのではないか。」という内容の発言が続きました。

詳しくは総括報告書が出ていますのでお読みいただければと思いますが、今の私たちの意識はどこに向いているのでしょうか。マイノリティの人権に敏感でいるのでしょうか。自分の都合を優先して見て見ぬふりをしていないのでしょうか。35年前のこの議論を読みながら、露骨な差別発言こそ少なくなっているとは思いますが、他者の痛みへの無関心や人を蔑む無意識さがないかと自問させられます。

日本バプテスト連盟「バプテスト NO.760」(2018.11)

協力伝道会議

「バプテストのアイデンティティー」

宣教部が感じている、協力伝道における喫緊の課題があります。諸教会の財政状況の厳しさに関連して、現在の連盟・支援制度の限界を感じています。これまで、バプテスト教会の「自主自立」という大切な理念のもとで、宣教部の支援制度は「教会強化支援」を目指すものでした。つまり、一つひとつの教会が強化され、自立していくことを目指した支援です。しかし一方、支援がなければ教会活動の継続さえままならない状況にある教会が数多くあります。目指されている「自立」の内実が問われています。

また、牧師等の教役者が今後ますます減っていくことが予想されます。財政的な事情により、フルタイムで牧師招聘が困難な教会も全体で大きな割合を占めつつあります。ひとりの教役者が、複数の教会を牧会していく「兼牧」という在り方の可能性を模索しなければならないかもしれませぬ。しかしここでもまた、バプテスト教会の「招聘制」や「牧師はその教会の教会員」といった、私たちがこれまで大事にしてきたものとの整合性を考えなければなりません。私たちが大切にしてきたバプテストのアイデンティティーについて、諸教会が抱えているさまざまな課題を踏まえながら、今後どういった「パラダイムシフト(発想の転換)」ができるのでしょうか。そして、そこからどういった可能性が広がるのでしょうか。協力伝道会議での、大切な話題のひとつとなっていくものと思います。

(宣教部長・松藤 一作)

「主に喜ばれる教会を目指して」

理事 辻浦 信生

「そして、毎日心を一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事とともにし、神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにくださった。」（使徒の働き 2章46-47節）

今年の3月に宣教研究所から「教会の自立に向けての提言」が出されました。2005年から2015年までの10年間で、礼拝出席者が著しく増加している教会を対象に行ったアンケート調査の結果を分析し、そこから見えてきた堅実な教会形成の要因がまとめられています。18教会にアンケートを依頼し、15教会からの回答を得て今回の提言の参考にしたとのことでした。

その提言の一つ、「自立かつ成長する教会形成のために、アンケートの分析から」の中で、「教師の長期牧会伝道の必要」が挙げられていることに注目したいと思います。アンケートに協力した15教会のうち、現在の教師の赴任期間が10年以上が4教会、15年以上が8教会という結果から、一人の教師が長期間にわたって同じ教会で伝道牧会にたずさわることの有効性が見えてきたのでしょうか。一人の失われていた魂を救いに導き、信仰者として成長・成熟に導くためには、長い年月にわたる祈りと養育が必要だからです。

その一方で、別の視点から見ると、教師の長期牧会の教会で成長が見られる理由が見出されると思います。それは、一人の教師が長期にわたって伝道と牧会に励むことを支える良好な人間関係です。教師と教会員との間に、信頼と尊敬、平和と喜びが保たれているならば、それは教会の雰囲気の良いものにし、教会員が家族や友人を教会に誘うことを励まし、また新来会者が定着することを助け、あるいは転居をして来たクリスチャンがその教会を選ぶ判断材料になることでしょう。その結果として、礼拝出席者が増え、受洗者が与えられるという面があるのだと思います。

冒頭に掲げた使徒の働きのみことばには、聖霊の働きによって生み出された初代教会の美しい交わりの様子が描かれていますが、そこには、一切のものを共有して共同生活を営んでいた神の家族の一致と愛の交わりがありました。そんな教会の歩みは、「民全体から好意を持たれ」、主は、「毎日、救われる人々を加えて」くださったのです。教会に多くの礼拝出席者が増し加えられていく一番の要因は、この教会の一致と愛の交わりにあり、またそれを支える平和と喜びが教会の中に保たれていることなのではないでしょうか。そのような教会を主は喜び、救われる魂を送ってくださるようにも思います。

教師と教会員との間に、信頼と尊敬、一致と愛の交わりが保たれるために、教師自身が果たすべき役割は大きいと言えるでしょう。まずは一人の人間として信頼を得られるように人格を磨かなければなりません。また信仰者として良き模範を示す者でもなければなりませんし、みことばの教師また説教者として、常に研鑽と努力が求められています。しかし、どんなに頑張っても私たちの成すことはいつも不完全で不十分なものです。そこで求められるのは、そんな不完全な教師たちを忍耐と愛をもって支え励ましてくださる教会員の存在です。主に立てられた器として教師を敬い、不完全さや弱さがあっても裁くのではなく、愛をもって受け入れ励ましてくださる教会員によって、教師は支えられ、愛のうちに教会が建てられていくのでしょうか。人々の愛が冷えていくと言われる終わりの時代にあって、キリストの愛に根差す者として、教会に平和と愛の交わりを保ちつつ、主に喜ばれる教会を目指して参りましょう。

（東御キリスト教会牧師）



イマヌエル綜合伝道団「イマヌエル教報 867号」(2018.10)

第4回若手牧師研修会

「少人数で、集中して…… 教会を学ぶ機会」

生涯学習課 田辺 寿雄

8月20日(月)夕方から21日(火)お昼にかけて、生涯学習課による若手牧師研修会を開催しました。これは、神学院を卒業して7年以内の先生方を対象としたもので、今年で4回目を迎えました。これまでは年会などに併せて開催していましたが、今年は時期をずらして、試験的に男性のみを対象とした小規模なものとししました。結果的に研修対象牧師3名、講師2名、計5名の出席者でした。また大阪伝法教会のご協力を得て、初めて教会を会場として行われたことは大きな恵みでした。

20日夕方は小礼拝で始まり、年会後約半年の歩みについて分ち合う時を持ちました。それぞれが牧会伝道の中で経験した恵みや失敗から学んだことなどを分かち合いました。

夕食後のセッション1のテーマは「教会のライフ・サイクル」(担当は田辺)でした。各自、ご自分が牧会する教会について事前に学んできたことを発表し合い、ライフ・サイクルという観点から見える教会の現在地を確認し、そこからどのようにして再生してゆけるのかを考えました。

21日午前のセッション2では、「教会建設」をテーマに国内教会局長の岩上祝仁先生がご指導下さいました。教会とは、クリスチャンとは、という定義の再確認に始まり、教会を建て上げ、人を育てるとはどういうことなのか、教会で行っていることが信仰を育て得る環境となっているかなど、様々な角度から考え、活発に意見が交わされる時でした。

少人数ゆえの自由な雰囲気の中、具体的かつ実践的な学びの時となり、御名を崇めます。

イマヌエル綜合伝道団「イマヌエル教報 868号」(2018.11)

JEA 宣教フォーラム

「東海を知る」ために 次の日本伝道会議へ

名古屋教会 内山 勝

9月24日(月)～25日(火)、在日大韓基督名古屋教会を会場に「東海を知る」のテーマのもと、JEA 宣教フォーラムが開催されました。

東海地域宣教協力の歴史について、長らく同地域で伝道牧会に携わって来られた内村撒母耳師(アッセンブリー名古屋神召教会)と河野勇一師(パプテスト教会連合緑キリスト教会)が発題されました。

東京と大阪の中間に位置し、宣教の働きに伸び悩んだ初期の頃の苦労が偲ばれました。「福音の谷間」と言われる現実の中で、だからこそ教会間協力が必要という自覚のもとで、1980年のグラハム国際大会以降、地域ごとに牧師会が形成され、それが東海宣教会議、東海福音フェローシップ(TEF)へと繋がったという経緯が証しされました。

続いて、パネラーたちが各地区の牧師会の様子を紹介しました。共通する特色として、「ゆるやか」で拘束力のない宣教協力が長く継続されて来たことが挙げられました。何か大きな集会をするために協力するというよりは、牧師同士の温かい励まし合いを大切にして来たということでしょう。

2日目には、JEA 宣教研究部門の報告に続き、①福音、②多元化社会、③国家、④環境、⑤グローバリゼーション、⑥ビジネス、⑦共生、⑧青年、の分科会が行われ、それぞれが関心のあるテーマについて学びました。

また、1日目夕に、KGK・hi-b.a・CCCの共同企画による青年集会「ミッション&ユニオン」が行われ、10～30代の青年が120名ほど集まり、将来への希望を感じさせるものとなりました。2023年には、日本伝道会議がこの東海地域を会場に行われることになっています。今回はそのプレ企画として大きな成果をあげました。今後の準備のために主の導きをお祈りください。

日本ホーリネス教団「JHC Revival 840号」(2018.10)

神の宣教(第7回)

<派遣> 「神の民の選びの目的」

東京聖書学院教頭 西岡 義行

アブラハムの選びの目的は、創世記12:1～3からわかります。この箇所は前半と後半に分かれ、それぞれ未来形の命令で始まります。前半は「立って出よ」、後半は「祝福となれ」です。クリストアァー・ライトは、この構造と二つの命令から神の民の選びの目的が見えてくると述べています(『神の宣教・第二巻』24頁以下)。

まず前半の未来形の命令は、「立って出て行け」です。口語訳では、「離れ---行きなさい」となっています。「あなたの国(土地/生まれ故郷)」「親族」そして「父の家」から離れ、「わたしが示す地」に向かって「出て行け」です。これは今までの歩みからの訣別、すなわち、混乱(バベル)のバビロンからの分離であり、同時にその中で育まれた親族、家族からの訣別なのです。

この命令に続いて「大いなる国民とし」「祝福し」「名を大きくしよう」という約束が続きます(2節)。実際には子どもが与えられておらず、人間的な子孫繁栄の希望は持てませんでした。そんな彼らに与えられた約束が、「大いなる国民とし---名を大きくしよう」でした。じつは、バベルの塔の問題は、自分たちの力で「名を上げる」ことでした。バビロンの生き方とは根本的に異なる新しい民の形成が描き出されています。バビロンの内側からの人間的計画ではなく、その外側から、しかもこの老夫婦から始まろうとする、神の介入なしには不可能な計画だったのです。

後半部分は、「祝福となりなさい」(新改訳2017)という未来形の命令で始まります。口語訳では「祝福の基となるであろう」と訳されていますが、「基」はヘブル語にはありません。この命令は、神がアブラハムを「祝福する」という2節の約束を受けています。祝福されるからこそ、祝福となりうるのです(3節)。

さらに、この祝福は「すべての民」に向けてられています。これもパベルに対抗しています。11章の短い記事に5回も「全地」が繰り返されています。神の計画は、最も弱い存在を通して、「すべての民」を祝福するという驚くべきものです。この「祝福」は、パベル的文明世界の延長線上にあるのではなく、神から選ばれた最も弱い存在からすべての民へと及ぶものなのです。

2つの命令をまとめると、神に選ばれ召し集められた民は、まずこの世の生き方から分かれたて、神のものとし、祝福を受けます。その上で、この民がすべての民に遣わされ祝福となるのです。この目的と計画を知る時、牧師として一人ひとりへの向き合い方が変わります。最も弱い存在が祝福される時、その存在を通じて、その周りに世が知らない神の祝福がもたらされるからです。



教会の将来を考える（5）

「教会教区再編委員会からの提言」

教会教区再編委員会 大前 信夫

りばいばる紙の「教会所在地一覧」や「祈りの栞」に、「巡回地」の表記があります。これは一般的には「伝道所」と呼ばれているかもしれませんが。巡回地について定まった規定はありませんが、①専任の牧師が任命されていない。②ある教会に所属しており、独自の教会籍はない。③定期的な礼拝など独自の活動はあるが、会計面では独立していない。このように言えるでしょうか。

巡回地となった経緯についてはそれぞれ違いがあります。ある巡回地は、教会が子教会として開拓を開始、教会とはなったが専任の牧師の任命が困難になり、母教会の「伝道所」の立場に戻っています。また、別の巡回地は、いずれは教会となることを夢見て、教会の「伝道所」として独自の礼拝や活動を続けています。

こうした巡回地の状態から、巡回地とは将来について考え、一つの決断をするまでの猶予期間だと言えます。これは個々の教会員の立場でも同じです。高齢になり、自動車の運転が難しくなれば、母教会との関わりと自分の信仰生活の将来を考えます。その時、信仰など辞めてしまおうとは考えないものです。牧師も訪問してくれ、一緒にこれからの信仰生活のあり方について祈り、考えてくれます。巡回地であるとは、この考える期間です。

そこで大切なことは、「信仰があれば」と信仰を理由に、現実を直視することを避けてしまわないことです。現実を直視しないことは、神の導きよりも自分の願いを優先させることにつながるからです。だから、「信仰をもって頑張りましょう」でなく、「教会はこれまで通りでなければならぬ」と拘るのでもなく、置かれた地域でどうあることがより主の心に仕えることになるかと祈り、考えるのです。

その結果、ある巡回地は母教会に合同になるでしょう。それとも地域にある他教団の教会に合同するかもしれません。そして、同じ地域で生きる信仰者たちとの交わりと協力を深めるのです。もちろん他教会に完全に合同するとは限りません。もしかすると、巡回地であることに積極的な意味を見出せるかもしれません。地域に密着した集会、牧師依存ではなく信徒の協力で運営される活動も考えられます。これまで通り-----に拘らない心であると、そこに新しいアイデアが生まれるかもしれません。もし巡回地になることが宣教のチャレンジになるなら、それも良いではありませんか。こうして「置かれた場所で」小さな花を咲かせるのです。

日本福音キリスト教会連合「JECA フォーラム NO.105」（2018.8）

「神の愚かさ、神の弱さは、人よりも賢く、強い」

キリスト教朝顔教会牧師 三浦 春壽

「神の愚かさ、神の弱さは、人よりも賢く、強い」（Iコリント1章25節）

「名が出ない、あれ、これ、それで用を足す」「あれどこだ。あれはあそこに、それですよ」（「シルバー川柳」ポプラ社）に自分を重ね、沢山のことを忘れていたのに、思い出すと恥ずかしく、頭を抱えながら、「主よ、憐れんでください」と祈らずにはいられない自分です。

正統性（正しさ）を振りかざし、論理的、理性的と思っていても、自意識過剰や自己顕示欲や偏狭だったとすることがあります。英国の作家で詩人のチェスタトン氏は、著書『正統とは何か』の中で、「詩人は気遣いになりはしない。…狂気を生むのは実は合理性なのである」と言っています。自分では理性的に語っているつもりでも、柔和さや謙遜さのない不寛容さだけだったのではないかと思うとどこかに身を隠したくなります。そんな自分がフォーラムに何かを書くということは恥の上塗りなのですが、JECAのことを考えた時に思い出すことができました。

JECA 設立の頃、八戸福音キリスト教会の牧師だった私は、東北地区の委員として単立連盟の委員会に加わりました。当時四者合同後の名称に「福音」を入れるか否かが話題になりました。それは福音宣教が様々な伝道プログラムを取り入れ、商業化、効率化による魂の獲得中心になった時期と重なります。伝道の熱心や勢いが強調され、神様の前に心砕かれ、悔い改める信仰よりも、キリスト教信仰の正統性による「滅びる魂の救い」が呼びかけられたのです。その結果、痛む人々、苦悩する人々に寄り添えず、共感をともなって社会的責任を担うことが弱かったように思います。やがてバブルが弾けると教会の中にも閉塞感が漂い、教会の伝道・牧会者の燃え尽き症候群、心身症、自死などが起こり、Doing から Being が、強調されるようになっていきました。

そんな時代に聖書の無誤性に立ち、この世の知恵では受入れ難い、キリストの十字架と復活の福音を伝え、自分に死に、自分の十字架を負いながら、キリストの統治と支配を宣言し、宣教協力をする JECA を強調するために「福音」が名付けられたことを思い起こします。

第一期の JECA 全国運営委員会の委員長は舟喜信師でした。目を閉じ、静かに委員の方々の意見に耳を傾けていた姿が印象的でした。そして全体の文脈を理解し、信仰に立った、現実的な舟喜師の発言は、霊的指導をも含めた判断に満ちていました。そして、JECA の宣教協力は「草の根の協力であり、各教会や各地区が主体的に判断し協力することで機能することを強調しておられました。JECA の基本理念は、上から全体を掌握するトップダウンではなく、各自が主体的に考え、決断して協力するボトムアップであって、安易に全国に期待し、依存することではないことを教えられました。

このことは JECA の英語呼称が議論された1992年4月30日に行われた第三回全国運営委員会議事録にも記されているように思います。当初英語訳呼称は、「Association of Evangelical churches in Japan」でしたが、ネーティブスピーカーのチェックにより「Japan Evangelical churches Association」とするのが素直で適当であると紹介されたのです。多くの教会が集まりながらもキリストにあって一つである普遍的教会を表現していることに納得しました。そして改めて私たちは教会論に対する理解が啓発され、夏期聖会や教職者会などで「教会論」を学びました。舟喜師の「神を信じる私、私が信じる神」の説教を通し、キリストが主体であり「私」ではないことを自戒しつつ、主体的かつ自立した考えや判断を大切にしながら連帯していく主の教会が JECA だと思われました。

JECA 全体が、互いに自立性を失わず、「福音」に立ち、私たちの側の小さく、弱く、愚かと思われるところに働く神の賢さ、強さを理解し、経験させていただきながら、執り成しの祈りをささげ、励まし合っていきたいと願われます。

日本バプテスト教会連合「連合通信 NO.231」（2018.12）

シリーズミニストリー西東④

「コンビニ型で多サイト（複数敷地）の緑教会」

緑教会牧師 河野 勇一

緑教会が開拓されて十年経ったころ、会堂の古さ、狭さから新会堂を祈るようになりました。別な広い敷地に移ることも検討されましたが、有松の地にやっと根を下ろしかけた教会は移るべきではないとの結論に達し、1989年、70坪の土地に現会堂を新築しました。しかし、収容能力は詰めて70~80人とそれほど大きくなく、間もなく主日礼拝の二部礼拝をスタートしました。同時に、公共交通機関の不便な緑区周辺は、いくつもの生活地域（コミュニティ）に分かれていますので、その地に住む信徒のリーダーを育てて、そのコミュニティ内で礼拝をささげる計画を立てました。

百人を越える多くの教会が、いわゆる「スーパーマーケット型」で一か所に集める方式であるのに対して、「コンビニ型」とでもいえるチャペル（衛星教会）方式です。これまでに役目を終えたチャペルの三つは撤退して、現在は「相生チャペル」（水曜朝）、「長久手チャペル」（日曜午後）、「徳重チャペル」（水曜昼）、「覚王山チャペル（オアシス・フェロウシップ覚王山）（日曜午後）」そして、水曜夜に有松チャペルでの「第三礼拝」が持たれています。有松を除いては、どれも教会堂を持たず、信徒の家庭で、ビルやレストランの部屋を時間借りで礼拝を持っています。

礼拝の持ち方としては、それぞれの集会のリーダーたちにより通常礼拝の流れに従って行われますが、説教は日曜朝の有松礼拝のDVD と、説教者が足を運んで同じ生の説教（だれが言い始めたか「ライブ礼

拝」と呼んでいます)とがミックスされています。それぞれのチャペルに集まる人は、多くても20人止まりですが、信徒たちかそのコミュニティに住む友人たちを誘って、ほとんどの方が歩いて集っており、そこから信仰を持ち、バプテスマを受ける方々も起こされています。

この方式は、献身的で訓練されたサーバントリーダー（僕として仕えるリーダー）がその地にいることが不可欠です。それでも、その人たちも齢を重ねたり、地域の人の動きが変わったりしますので、それに柔軟に対応してきました(現に三つ撤退していますし、これもコンビニと似ています)。今後もこの方式が機能するかどうかは、ひとえにサーバントリーダーが育成されるかどうかにかかっているといっても過言ではありません。ただ、教会数が圧倒的に少ない東海地域において、人々の身近なところで礼拝が持たれるというニーズは変わることがありません。

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団「アッセンブリー News NO.757」(2018.10)

伝道特集

「外から見た日本の伝道」

熊本聖書教会 長澤 牧人

日本の伝道にとって、インターネットの活用が重要であることは常識になりつつあり、中央聖書神学校でも教科となり、すでに活用している諸教会が多いので、今さらながらという感がありますが、あえてアメリカの教会のインターネット活用の視点から日本の伝道を考えます。

ネットで教会を探す

アメリカの教会が、日本の教会の未来を写す鏡になる最初の点は、教会のウェブサイトです。2009年のアメリカの調査では、アメリカ人の教会選びで、ホームページが入口になった割合は34%でした。それが2012年には46%に増加しました。2018年には5割を超えているはずですが。2012年の時点で、現在通っている教会をホームページを通して知った割合は33%でした。2018年はさらに増えているでしょう。つまりアメリカでは、クリスチャンの5割近くがホームページを検索して出席する教会を選んでいきます。

ネットの世界に存在しない教会は見つけてもらえません。九州教区の博多ニューライフ教会はインターナショナルな教会です。2017年度の新来者113名は、ホームページを検索して礼拝に出席しました。とくに外国人訪問者においてこの傾向が顕著です。

教会が何をしているかを知らせる

アメリカ人は、ネットで検索して、自分に合った教会を探します。ホームページは、その教会がどういう教会か、何をしているのかを教えてください。アメリカはキリスト教国ですから、国民は教会がどういう場所かはなんとなく知っています。日本人が、神社やお寺がどういう場所か、なんとなく知っているのと同じです。そういうアメリカ人ですら、教会に足を運ぶ時には、事前にネットで情報を入手しようとします。日本のように、国民の大多数が教会が何をしている場所か知らない国では、なおのこと教会についての情報を提供する必要があります。

統計をもとに考えてみましょう。超教派団体の「エリヤ会」が2003年に、マーケティング会社に委託して行った調査によれば、日本のクリスチャン人口は1%ですが、キリスト教に関心を持っている人口は9%もいます。キリスト教に関心を持ちながら、なぜ教会に行かないのか理由を尋ねると、40%の人が、「教会が何をしているのかわからないから」と答えました。つまり、キリスト教に触れてみたいけれど、教会が何をしているのかわからないから躊躇しているのです。

以前の日本では、電話帳や電柱の広告などで教会の存在を知らせました。名前、電話番号、住所は知ることができますが、教会が何をしているところなのかがわかりません。

見目が大事

では、ウェブサイトを作れば十分かと言えばそうでもありません。アメリカの調査によれば、46%の人が、ウェブサイトのデザインの良さが、その組織の信用度を測る第一の基準だと答えています。実際、94%の人が、かっこ悪いデザインのウェブサイトに掲載されている情報を信用しないと答えています。そういう事情もあって、アメリカの教会のウェブサイトは、日本の教会よりデザインが洗練されています。「見た目より中身」という発想は通用しません。見目が悪いと中身が信用されないのです。

ちなみに、検索者がウェブサイトの良さを判断する時間は、10秒だと云われています。10秒間の第一印象が悪いと、他のサイトに移る人が多いということです。アメリカの心理学者アルパート・メラビアンは1971年の研究によれば、第一印象を決定する要素の割合は、視覚情報が55%、言語情報はわずか7%だそうです。教会のウェブサイトは、言語情報だけではなく、教会が何をしている場所なのかを視覚情報で魅力的に伝える必要があります。

説教を聴くのが第一位

さて、2018年のアメリカの調査によれば、アメリカのネット人口の44%がポッドキャストを利用しています。ポッドキャストとは、インターネット上で音声や動画のデータファイルを公開する方法です。アメリカ人が、教会のウェブサイトを利用する目的の第一位が、「説教を聴くため」だそうです。事情があって礼拝に出席できない人、教会を離れたが説教は聴きたい人、クリスチャンではないがキリスト教に関心を持つ人が主に利用しているのでしょうか。ちなみに、第二位は、「奉仕の機会を探す」、第三位が「集会情報」、第四位が「気に入った内容を知人に転送する」、第五位が「訪問者案内」となっています。

「エリヤ会」の調査では、キリスト教に関心はあるが教会に行かない理由として、もう一つ多かったのが、「教会が近くにないから（40%）」という答えでした。ネットで説教音声・動画を配信することで、教会に行きたいが遠くて躊躇している層に、福音に触れるチャンスを提供できます。関心のある未信者が、最もキリスト教に求めるのは、「心のやすらぎ（80%）」だという調査結果があるので、未信者向けに特化した、心が安らぐメッセージを発信するのも一つの手です。

またアメリカでは、礼拝の様子を生配信（ライブ・ストリーミング）する教会がたくさんあります。同時中継ではなくても、録画を配信する教会も増えています。アメリカの識者たちは、入院して礼拝に出席できない信徒、出張で出席できない教会員、旅行で出席できない信者が、ライブ・ストリーミングで礼拝を視聴したら、礼拝に出席したと見なすよう勧めています。ネットがない時代は、身体が教会堂に来ないと出席したとみなさなかったのですが、ネット時代には「出席」の概念が変わりつつあります。視聴者数も礼拝出席数に加えるという提案です。

「会堂に足を運ぶ人が減るのではないか」と危惧する声があるかもしれませんが、アメリカではむしろ長期的には増えるという予測が出ています。

「エリヤ会」の調査によれば、キリスト教に関心があるが教会に行かない第二の理由は、「拘束されたくないから（30%）」でした。熱心なクリスチャンは、「けしからん。礼拝出席は拘束ではない。献身だ！」と憤慨するかもしれませんが、信仰が芽生えてこそ、拘束ではなく献身とを感じるのです。パウロ曰く、「聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう（ローマ10:14)」。信仰が生まれれば、自然と教会堂に足が向かうのではないのでしょうか。問題は、いかに未信者との接点を増やすかです。

まとめ

中高年が多い日本の教会では、オンライン化のニーズはまだ低いかもしれませんが、しかし、将来に備えましょう。沖縄の全国ユースキャンプに参加しました。若者たちは、身体の一部のようにスマホを使いこなしていました。10年後には、この世代が教会の屋台骨になります。

アッセンブリー教団の牧師の平均年齢を考えれば、若い信徒の賜物を活用した方が効果的かもしれません。社会全体がIT化する中、日本の教会も追いついていく必要があります。

あとがき

2019年、新たな年を迎え、ここに第14号を発行することができることを感謝いたします。本年も引き続きご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

今回号の巻頭言は、TCUの卒業生でもあり、昨年若くして保守バプテスト同盟の議長になられた大友幸証師にお願いして寄稿していただきました。大友師は、次世代育成を通して教会がイノベーションをすべきこと、逆に言えば、教会がイノベーションをしなければ、次世代育成もなく教会は衰退していくとされているように思います。

ちなみに保守バプテスト同盟は、2018年度総会で「ビジョン2030」を決議しました。「ビジョン2030」では、〈五つの献身と課題〉に続く〈ビジョン2030の提言〉として、次のような具体的な目標を掲げています。（「ビジョン2030宣言文（2018-2030）」から一部抜粋）

1. 宣教協力について

私たちに委ねられた宣教の使命を果たすため、2030年までに、少なくとも20の教会形成を目指す開拓伝道を推進する。またその推進のために必要とされる開拓伝道基金の拡充を進める。

2. 次世代育成について

宣教の働きが将来にわたって継続するため、また教職者の高齢化に対応するため、2030年までに、少なくとも30人の牧師を輩出する事を目指す。そのために次世代育成基金、神学生奨学金の拡充、任職委員会の効果的な活用を推進する。

このように、保守バプテスト同盟全体としてのビジョンを明確にし、同盟を挙げてその実現に取り組むとともに、リーダーとしては、旧弊や硬直化した知識や体質に捉われない若い感性に委ねるといふ、ここに次世代育成の一つの在り方が示されているようにも思います。

「教会は変革を嫌う。それでも教会における根本的な変革はいまや、必然にして急務だ」とチャールズ・リングマは言っています（『風をとらえ、沖へ出よ』）。

しかし、現状キリスト教会全体に「危機意識」が高まる中においてもなお、変革を阻んでいるものは何なのでしょう？ 自らの現状に安住し、公同の教会として「危機意識」を共有しようとしなない人は言うまでもありませんが、敢えて例をあげれば、批判的な「意見」に対して、みことばに仕える者としてふさわしく、理性的に、また神学的な土俵に立って正面から応えようとせず、自らの権威や体制を守るために虚勢を張り、聞く耳を持つとしない権威主義的な指導者が、変革を阻む最大の要因ではないか、と言っては言い過ぎでしょうか。

教会の自己改革は、宗教改革がそうであったように「宗教の純粋性回復」、すなわち聖書の教えに戻ることに、特に「教会とは何か」についての本質的な理解に常に立ち戻ることであるとすれば、イノベーターに求められるのは、「神の国とその義の実現を第一に求めて、絶えず神学する心」ではないでしょうか。ビジョンも変革に対する意欲もない組織や教会は、衰退する他ないことを肝に銘じたいと思います。

（初穂）

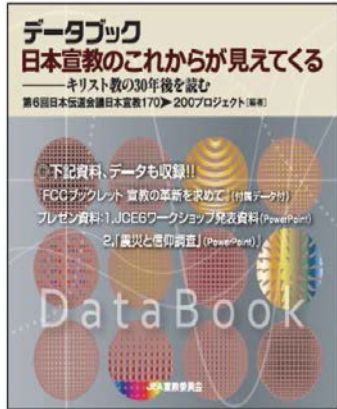
献金者名（2018年9月～2018年12月）

◎尊いご支援に、心から感謝申し上げます。（敬称略）

清瀬福音自由教会、柴田美枝子、渋谷和之、島田治夫、 SEND 国際宣教団、
日本キリスト合同教会、日本聖契キリスト教団、本郷台キリスト教会、柳下弘

刊行物紹介

データブック 『日本宣教のこれからが見えてくる』 CD-ROM 版（好評発売中）



グラフや図がカラー
表も見やすい
有用なデータが満載
プレゼン資料も収録
定価 1,000 円+税

【CD-ROM の内容】

- 『データブック「日本宣教のこれからが見えてくる」—キリスト教の30年後を読む』
- 『データブック FCCブックレット 宣教の革新を求めて』 (付属データ付)
- プレゼン資料: 1. JCE6 ワークショップ発表資料 (PowerPoint)
2. 「震災と信仰調査」 (PowerPoint)』

【発行】日本福音同盟 (JEA) 宣教委員会

【お申込み】住所・氏名・必要冊数・Email アドレスを、以下の連絡先にお送りください。
なお、書籍代+送料実費がかかります。

E-mail: fcc@tci.ac.jp 又は FAX:0476-31-5521

キリスト教葬儀研究会

日本宣教におけるキリスト教葬儀 開かれたキリスト教葬制文化を目指して

巻頭言	倉沢正則
一般葬儀とキリスト教葬儀の現状	柴田初男
日本の葬送儀礼の宗教的背景	大和昌平
葬儀論から日本宣教論へ	稲垣久和
近代日本における死者儀礼と教会	篠原基章
—キリスト教葬制文化を形成していくために—	
未信者にも開かれたキリスト教葬式を求めて	倉沢正則
キリスト教葬制文化開拓のケース・スタディ	清野勝男子
付記「キリスト教葬儀に関するアンケート調査」報告書	日本宣教センター
まとめ	大和昌平
コラム 1~5 終活セミナー開催の理由他	野田和裕

NO.10

February 2018



東京基督教大学 国際宣教センター

定価 1,000 円+税
好評発売中

【お申込み・お問合せ】

E-mail: fcc@tci.ac.jp FAX:0476-31-5521

感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ (JMR)は、今年の4月で発足から6年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス (CIS) の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき、活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2019年度も、2018年度と同様、JCE6「日本宣教170➤200プロジェクト」の流れを引き継ぎ、JEA(日本福音同盟)宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の課題である「教会の再生」「次世代育成」「地域宣教ネットワークの構築」に取り組んでいきます。

どうか引き続き JMR の働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

JMR の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

- (1) **特別賛助会員**：趣旨に賛同し、支援してくださる教団・教派、宣教団体等
 - ・一口 30,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年 1 回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (詳細篇) のご提供
- (2) **一般賛助会員**：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
 - ・一口 2,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年1回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (概要編) のご提供

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金(献金)は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金(献金)額の約 50%となります。

詳しくは、☎0476-46-1131(TCI 募金係)までお尋ねください

郵便振替口座:00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

* お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。
(振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL: 0476-31-5522 FAX: 0476-31-5521 E-mail: jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一 (東京基督教大学学長)
日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男